

風のたより143号 ピースボートより その14

5月14日に横浜から乗船した62回クルーズのピースボート。この船ならではの企画の一つに、水先案内人とよばれる国内外の各分野の専門家が寄港地ごとに乗船し、訪問する国々の文化や社会問題について語る講座があります。

■ ジャーナリストの伊藤千尋さん、5月15日「人はなぜ旅をするのか」講演

今回水先案内人の一人目として登場。歴史の変わる瞬間に立会い、それを伝えるジャーナリスト使命を持った彼に惹かれました。

さて前回142号の続きです。「踊らずして人間？」に続いていきますが、そのまえにちょっと伊藤千尋さんストーリー

■ 日本の常識は世界の非常識？

最初に世界に出たのは1971年、大学2年20歳。1ドル360円で持ち出しは500ドルまで。これは海外に出るな！ということではないか……。

日本の常識は世界の非常識？

なにか息苦しい。でも何が違うかわからない。行ってみないとわからない。ということで選んだのはキューバ。革命から12年後ゲバラ死後3年。そのころキューバは経済封鎖されていた。

■ キューバでボランティア

大きな国（アメリカ）が小さな国をいじめるのはおかしいのではないかとアメリカの学生がキューバでボランティア、続いてヨーロッパでも日本でも。そんな記事の新聞を見てでかけた。キューバのサトウキビ畑で半年間働いた。

360度見渡すかぎりサトウキビ畑。2m以上ある竹みたいなナタ、体を90度折って根元を切る。それは単純労働。きつい労働でした。奴隷労働です。キューバの炎天下です。日本から来たからがんばろうとがんばった。

■ 歌をうたうパナマの学生

ペアでする仕事を同学年のパナマの学生ラファエロと一緒にした。15分くらいたつと休む。歌を歌う。ナタをギターにみたてイエローサブマリンをスペイン語で歌う。またスペイン語でべらべら話す。

日本を出る前に2ヵ月半スペイン語を習ったが彼の言っていることはわからない。これが毎日半年間続いた。おかげでスペイン語が上達。

■ 踊らずして人間？

夕方キャンプに帰ると「シャワーもいらない。食事もいらない」くらいくたびれて寝たいのに、踊ろうと誘われしかたなく見よう見真似で踊る。

そのうちにわかってきた。踊りも自分の人生に繰り込んでいる。日本人はしゃかりきすぎる。踊らずして人間かと問われるような思いだった。

■ キューバの学校

ある日村長さんが言った。「海水浴へ行こう！」と。

途中の小学校でトイレタイム。先生がでてきて説明をすると「日本から我がキューバを助けに来てくれた人が来た」と校長先生に伝えた。

ただトイレを借りにきただけなのに……。全校生徒が集まり（並んだ線はきちっとは並んでいない）一人の生徒が出てきたと思ったら歌を歌う。しかもそれは恋の歌。踊りながら生徒も聞いている。歓迎は一緒にいい思い出を残そうね、ということだ。日本での自分の学校の様子を思い出した。

■ 日本の学校

男子は詰襟の学生服。女子のセーラー服も海軍の制服。軍隊の服を着せて、整列され、校長先生の話に（それも面白くない）、ひたすら耐えるということを教え込むのが日本だと思った。そんな日本の教育を思い知った。日本の社会が何かおかしいと思ったけれど、こんなことにも思いあたった。

■ 就職の内定は決まったが……

大学4年、全国版の新聞社を受けた。内定は決まった。が「いやだ！就職なんかしたくない」とふと思った。学生時代にしたりないことがあると思った。むしように旅をしたくなった。

■ ルーマニア語習得方法

大学で、なんだかおもしろそうだと思ってルーマニア語のゼミを受けたが、2～3回出席してやめていた。夏休み明けにゼミに出たら誰もいなかった。先生は、生徒がいないとゼミが成立しないのでやめるわけにもいかず、1対1の授業がはじまった。教室から先生の部屋へ、そして家へ、遠いところに通った。好奇心を持つものじゃないなと思った。が家を訪ねたらちょっと素敵な娘さんがいた。

娘さんに「カロオケ行かない？映画行かない？」と誘った。そうして通ううちルーマニア語も習得。通訳ほどではないけど、エンジニア12人通訳を頼まれた。機械ものは技師同士でわかる。こんにちは！名前は？程度の会話の手伝いでOK。そんなこともあった。このルーマニア語習得が後に役立った。

■ アドベンチャープランに応募

ある新聞社がアドベンチャープランを募集していた。プランに1000万円（今の3000万くらい）の賞金。紀貫之が紀行を文学にしたように日本人は旅好き。人は旅が好きだ。「人はなぜ旅をするのか？」

ヨーロッパを放浪しているジプシー。どんな人たちなのか？

文化人類学的に見て、一緒に暮らしながらなぜ人は旅をするのか？をテーマに応募し、他のグループと折半で懸賞を受賞。

一週間後入社式の通知。すでにいろいろな研修を受けていた。新潟支局配属も決まっていた。迷いに迷った。でも頭の片隅でわけのわからないところへ行きたいと思っていた。地位お金は捨て、分けのわからないロマン、夢をおいかけ半年間の旅に出た。就職内定は断ったけれど、一年後また受けて現在その会社にいる。

ロマ（ジプシー）の人は本当はインド人。ゲルマン民族の大移動、同じころ中央アジアはヨーロッパだけでなくインドの人々が追い出されて追いだされてヨーロッパへ。エジプシャン、エジプトのほうからやってきた。なまってジプシーになった。

■ 人間の血は99% 流浪に基づいている

ロマの言葉を知らなければならない。日本語ジプシー語辞典を手作りで作って準備。同時に文化人類学者寺田さんを訪ねた。「人はどうして旅するのか？」と聞いたところ、「人類100万年の歴史、定住し始めたのはわずか1万年前。人間の血の99%は、流浪に基づいている。」と語った。

ルーマニア、首都ブカレストからレンタカーを借りて走れば、すぐジプシーにであつた。ジプシー語が通じないので、ルーマニア語を使って話してみてもジプシーは話してくれない。

■ ジプシーの言葉をみつけよう

同じ仲間の言葉、ジプシーの言葉をみつけるため、マケドニア首都スコピエの3万6千人のジプシーが住んでいる村に行った。それはユーゴスラビアのチトー大統領が住んでいいとジプシー達に言った成り立ちの村。

毎日毎日家に呼ばれる。坂上次郎さんによく似た人の家にもよばれた。靴をぬいであがって行って、ジプシーの音楽を聴いたあとに、日本から持ってきた日本民謡をかけた。ジプシーの音楽にあわせて踊って、横に手を振っていておばあさんは、手の振り方が前後になった。このように暮らしながらジプシー語を覚えた。

■ 「一ヶ所にとどまれば精神がくさる」

幌馬車12台くらい円陣を組んでいた。彼らに話しかけると、同じ仲間に違いないと思い大歓迎してくれる。シチューを煮ていた。食べ終わったころ中学生くらい（子どもらは学校へ行っていない）の年齢の女の子が手招きする。暗がりに行く。とうもろこし畑。そこでいきなりとうもろこしをもぎ始めた。「早く取れ」と言われた。袋がいっぱいになってかついでいっしょに走り出した。これは、どろぼうだ！ルーマニア人が作ったのに、これはいけない行為だとさとした。

彼女は言った。「どうやって作っているか知っているか？」「自然の力でできる」「今日とった分は明日の生きるためのものを天の恵みをもらうのがなぜいけないか？」と。こんな論理もあるのかと思った。

こんなことがフランスでありました。

貧しいおかみさんがパンを盗んだ。子どものために盗んだが窃盗にならなかった。

いいかどうか別として、彼らには別の論理がある。

ロマのことわざ「一ヶ所にとどまれば精神がくさる」生活は苦しい。空き地をみつけてテントを張る。夜中に警察などにたたきおこされまた移動する。彼らは精神の自由を選んでいる。ヨーロッパ人の呼び名がジプシー、彼らは自分たちの言葉で「ロマ＝人間」と呼んでいる。日本でもアイヌとは人間を意味する。

■ 懐がおおきい新聞社に入社して特派員に

最初受けた新聞社に入りなおした。最初ブラジル・スペインの特派員、サンパウロから車で8時間行った奥地。日系人100人くらいの農場兵庫県出身、弓場（ゆば）がある。以下は、[風のたより138号ピースポートより9号参照](#)。

■ ピースポートには1987年に乗船

中南米特から帰ってきたらピースボートスタッフが「世界一週をやりようと思っている。出来るか？」と聞いてきた。「簡単 簡単」と答えた。が、本当にやってびっくり！

計10週間くらい乗っている。南回り、裏側ブエノスアイレス1日半かかって行き、チリのむこうは南極のところブタアイレス、2日間かかって帰ってきた。乗船している時間より、往復の時間のほうが長いということもあった。

■ 思い出は、リバプール乗船

イギリスから乗った時のこと。

すごい暴風雨3つ台風が来たのに、吉岡は船を出す。3日間、ゆれるところではなかった。足は上になり、頭は……。二度と船には乗るまいと思った。3日間寝込んだ。こんなに苦しんだのだから楽しまなければ損だ。ともにこの旅を乗り越えた乗客は戦友という感じ。酔ったら酔ったで楽しみがでてくる。

ピースボートは世界でも素晴らしいNGOだ。大阪人の発想を持っている。お金が集まらなければ集めればよい。1回目は、言いだしっぺの大学生4人が400万赤字をかぶった。一人100万、でもやめなかった。物忘れがいいのか、楽しかった思い出をたくさんの人に味わってもらいたいという思いで今に続く。

■ 地球一周の旅

日本にはなかった発想をもって、吉岡さんたちは30代でそれを実現。（風のたより131号 ピースボートより2号参照）新しい船ごとに、責任パートナーが寄る。言いだしっぺが責任をもつ。楽しむ。お金も出し合う。がんばるといっても苦しむのではない。喜びが言動力。

やることによって、次に新しい人がそれらを吸収すると同時に多くの人に体験してもらったことで社会を変えていく。多くの人にも夢をわかちあってもらうというこの船旅は、日本だけでなく世界でもまれた。

■ 一人一人の若者たちが支えている

世界のレベルに達していて、世界にないことをやっているピースボート。地球一周の船を出そうという思いを、一人一人の若者たちが支えている。ボランティアスタッフがささえる。電柱にポスターを張る。笠地蔵作戦。電柱も寒かろう。電柱をいたわるそんな発想でやってきた。どんどん膨らんでいる。10年前20~30人今は100人、旅行業のジャパングレイス100人、25年前に起業していまや200名の雇用する団体へ成長。集まる人がピースボートをつくっていくから大きく

なる。生みの苦しみ楽しみを知っている唯一のスタッフ吉岡達也さんの話は [風のたより131号 ピースボートより2号参照](#)。

■ 自分の居るべき場所を求めて

住んでいるところがいやなら、行けばいい。探せばいい。自分のあった場所をつくったらいい。

スペイン、バルセロナの教会にある彫刻は日本人の作品もある。その人は日本で彫刻家では生きていけない。とりあえず学校の先生になった。でも夢は捨てきれない。

夏休みにヨーロッパへ行く。とりあえずドイツ、でもドイツの彫刻は彼の感性にはあわなかった。来た汽車に乗ろう。その汽車が着いたのは、スペインのバルセロナ。奇妙な教会、ガウディのサグラダ・ファミリア教会。彫刻を地下でしていた。身振り手ぶりで僕にもやらせてと言う。主任がたまたまきたので、働かせて欲しいと依頼。一週間で作る課題を仕上げ採用された。夢を捨てなかった例です。そして一步を踏み出した。とにかく行ってみる。自分が行動していく。いやなら周りを変えればいい。

■ 3回目の特派員はアメリカ

堀江健一、サンフランシスコにヨットで上陸した。3年に1回冒険にでかける。講演で生きている。冒険家として生きている。どうしてするの?の質問に彼は「僕は子どものままなんです。おもちゃが欲しい欲しい、ヨットにのってどこかへ行きたい! それだけ。ヨットは手段。違う世界へいきたい。」と答えた。

日本では国境を侵している犯罪人のようなバッシング、アメリカでは英雄の扱い。途中で日本も態度を変える。ヨットで必ず酔うという。当たり前です。サンフランシスコに船が飾ってあるがそれはとっても小さい。

■ 自分の体験は自信になる

「人はなぜ 旅をするのか」

われわれは何者なのか? われわれはどこから来たのか? われわれはどこに行くのか?

旅をする理由は、自分って何者だろう? 何を人生ですればいいんだろう? 何をしたいんだろう? と問うて、違う世界で新しい知識を得る。旅は苦しいが、したら自信がつく、新しい自分が出来ていく。自分の体験は自信になる。

■ 誰でも自分の星がある

ロマと暮らしていたころ、ロマの男の子（中学2年くらい）につれられて暗いところで見上げると、空は満点の星。ジプシーのことわざに、地球上には人間の数ほど星があり、誰でも自分の星があるという。そしてその男の子が一番光っているのが自分の星だという。

新聞社にいた川崎の支局長の時、川崎公害訴訟の判決で夜中の4時ごろまで働いて、仮眠しようと家路に着く時空を見上げた。汚い空。そうだルーマニアの空は星が輝いていた。赤い星、黄色い星、大きな星、小さな星、いろいろあるがみんな光っている。日本の空では星は見えない。日本は高度成長でもって、どんどん物を作って売れ。大量になることは豊かになること。友情をうらぎって、愛情なんかどんどん切り捨てる…。と進んだ結果、星が見えない空になり、人間性が捨てられた。金のために、自分の人生も輝けないような社会にしてしまった。

■ 星が見えないことは、人間が輝いていないということ

この世の中60億人みんなそれぞれ旅している。日本の社会では発揮できない。他の人の輝きが見えない。他の人の輝きも見たい。新しい自分を見つけたいと思っている。一歩踏みだせる人はそんなにあるわけではない。ピースボートの乗っている皆さんは新しい自分を見つける機会がどんどん広がっている。

■ 新しい体験によって、新しい自分に生まれ変わる

体験を話していく。それによって自分の見たことはこういうことだったのかと自分でわかる。だから今のうちにみんなと友達になって、あなたも輝きたいんだね。私もそうだよ。と語り合う、そのような社会がピースボートに生まれる。3ヶ月の航海を終えて日本に戻った時、自分は変わったな～と実感できる旅になると思います。

以上が、乗船して2日目の伊藤千尋さんの講座でした。ふと窓を見れば海、まだ日本の海域でしたが、揺られながら聞く船上でのこの講座は、地球に乗っている人と同じようなイメージにもなり、心が少し高揚しました。

■ 6月29日今日はノルウェー

今日、6月29日はノルウェーの海域。もうじきベルゲンという港街に着きます。海はちょっと暗い感じですが、晴れば明るくもなるでしょう。一日中、晴れたり、曇ったり、降ったりという土地だそうです。これから環境問題にフォーカスし

て講座は続きます。田中優さんの講座が昨日から始まりました。アイスランド、グリーンランドと船旅は続きます。

電子メール : huzu@huzu.jp

ウェブページ : <http://www.huzu.jp/>

風の交差点 風"s